

英語不定詞論 (3)

— Jackendoff and Culicover(2003)における概念意味論的コントロール論をめぐって —

鈴木 博 雄

0. はじめに

筆者は鈴木(2001)において、英語不定詞補文を補部 (complement) (あるいは、付加部 (adjunct) の可能性もある) とする構造は全て <(to+) 不定詞> 直前に PRO が存在することを主張した。つまり、(1) において、believe は通常、コントロール動詞 (control verb) とは見なされないで、PRO は存在してはならないという理由から (1a) の構造が支持されてきた。

- (1) a. I believe [him to be honest].
b. I believe him_i [PRO_i to be honest].

しかし、(1a) において believe が him に目的格を与えるためには例外的格付与 (exceptional Case-marking: ECM) の概念が必要となる。本稿では詳述する余裕はないので結論だけを述べるならば、ECM はアドホックな (*ad hoc*) 規則であり、普遍文法 (UG) には組み込まれてはならないものと筆者は考える。従って、believe についても (1b) の構造が妥当なものと仮定する。更に、(1b) の him はドイツ語文法で言うところの「所有の3格 (dative)」^(註1) と想定すれば、上の筆者の仮説が補強されることになる。英語においても (2) のような「所有の3格」を含むと思われる構文が存在する。(1b) についても、「私は彼の正直さを信じる (⇒私は彼が正直であると信じる)」と解釈するならば同文の him を「所有の3格」と見なすことにある程度の理屈が見いだせる。

- (2) She made him a good wife. (彼女は彼の良き妻となった)

以上、不定詞補文に従える動詞はコントロール動詞に限定する十分な根拠はなく、PRO を用いた分析を UG のレベルで展開していくことの可能性を示唆した。ところが、PRO のコントローラー (controller) の分布については、生成文法において長年研究されてきたものの、統語レベルだけに着目した説得力のある説明は今のところ提案されていない。つまり、(3) は (1b) と異なり何故、PRO のコントローラーが目的語 me ではなく、主語 he なのか、ということについて、どうしても意味論的、語用論的な立場からの説明が必要となってくる。

- (3) He_i promised me [PRO_i to buy the bicycle].

(3) は, Rosenbaum (1967) の最短距離原理 (minimal distance principle) に違反した位置にコントローラー (he) が存在する。このような現象を解決すべく多数の研究者が意味論に傾倒した議論を展開してきたのであるが, Jackendoff and Culicover (2003) (以下, J and C(03)) も母型節 (matrix clause) の主動詞 (main verb) の意味論的特性及び主動詞が従える項 (argument) (内項, 外項の別を問わない) の意味論的, 語用論的特性に着目しながら, 英語のコントロール現象を扱った論考である。以下, 同論文の内容を概説したうえで, それに対する若干の論評を加えてみたい。

1. Jackendoff and Culicover (2003) の概念意味論的コントロール論の概要

1. 1 統語論とコントロール類型の間には相関はない!

従来コントロールは, 義務的 (obligatory) なもの (cf. (4a)) と恣意的 (arbitrary) なもの (cf. (4b)) に二分され, 研究者により更に独自の下位分類がなされてきた。

- (4) a. I_i want [PRO_i to swim in this lake].
b. [PRO_{arb} to swim in this lake] is dangerous.

J and C(03) はコントロールを (5) のように5種類に大別する。

- (5) a. unique control (=obligatory control) cf.(4a)
b. nearly free control
A: John_i talked to Sarah_j about something.
B: What was it?
A: I think it was _{i/j/i+j/gen}taking better care of himself/herself/themselves_{i+j/}oneself_{gen}. (p.523) (註2)
c. free control (=arbitrary control) cf.(4b)
d. exhaustive vs. partial control (註3)
John and Bill_i/John_j managed to _{i/j}meet at six. vs. John_i wanted to _imeet at six. (p.548)
e. obviate vs. nonobviate control (註4)
i) Beth_i hopes to _ileave early. Beth_i hopes for her_i to leave early.
ii) Nelda_i discussed _ileaving early. Nelda_i discussed her_i leaving early. (p.552)

しかしながら, 既に述べたように, 上の5分類のいずれかについて当てはまる用例におけるコントローラーの位置を統語レベルで完璧に規定することはできず, むしろ, 同論文は概念意味論 (conceptual semantics) のレベルでコントローラーの位置を規定することの妥当性を主張する。

概念意味論に立脚しながら英語のコントロール現象を分析することの利点について, J and C(03) は次の3点を挙げる。

- (6) a. At the level of CS(=conceptual structure), syntactically implicit arguments are explicit, so that an antecedent is readily available for (nearly) free control.
 b. At the level of CS, the meanings of verbs are explicitly represented in such a way that they can directly bear on control relations without special added machinery.
 c. Finally, CS is the level at which thematic roles are structurally represented, so that the association of control with constant thematic roles is natural.

(註) 丸括弧及び、下線を施した語句は筆者による。 (p.520)

更に、概念構造 (conceptual structure) を用いないと解決が困難なコントロール現象として、同論文は次のような用例を提示する。

- (7) a. John attempted (*for his kids) to have a better life.
 John strove (for his kids) to have a better life.
 b. Sally beseeked Bill (*for his kids) to leave.
 Sally begged Bill (for his kids) to leave.
 c. Fred hoped (for Sally) to leave.
 Fred's hopes of (*Sally's) leaving
 d. Vera left George so as (*for Fred) not to go crazy.
 Vera left George in order (for Fred) not to go crazy.
 e. Before (*John's) mentioning Harry, Bill was already nervous.
 Without (John's) mentioning Harry, Bill was already nervous.
 f. the best place at which (*for you) to buy hummus
 the best place (for you) to buy hummus

(pp.520-521)

(7) で重要なことは下線を施した動詞、名詞 (c. の動詞 hope と対応する名詞 hope)、不定詞補文、動名詞補文の意味が同一または類似しているにもかかわらずコントローラーの選択の仕方に違いが見られるということである。つまり、(7) における文法性の差異は統語レベルでは求められないということになる。

次節ではコントロール現象を支える意味論的根拠について、J and C(03) の着想を見ていく。

1. 2 コントロール補文の<行為性>

J and C(03:524) は、情況 (situation) を通常呼ばれているところの事態 (state) と事象 (event) に区分し、更に両者は、行為 (action) と非行為 (nonaction) の2つの成分のいずれかを有するとする。行為と非行為の違いは、“What X did was テスト” により明確になる。

- (8) a. Actions

What Roberta did was run the race/read a book/think about physics.

- b. Nonactions

What Roberta did was ?grow taller/*strike Simmy as smart/*realize it was raining.
(p.524)

(9 a)において, urge は自発的行為補文 (voluntary actional complement) を従えることがわかる。

- (9) a. Miriam urged Norbert to dance with Jeff/*to be six years old.
b. Nancy wishes/hopes to run the race/to grow taller. (p.525)

ここで, J and C(03)における状況補文 (situational complement) の説明をしておく必要がある。状況補文は行為 (action) を内包し得る。つまり, (9 a) の be six years old は単なる状態 (state) であって行為 (action) ではない。一方, (9 b) の to grow taller は状態 (state) に加え, 非自発的行為 (involuntary action) を内包する状況 (situation) を表しているものと言える。以上の用例から得られる結論として, 唯一的 (unique) コントロール動詞は行為補文のみを選択するということが言える。(p.527) 尚, 上の結論を補足する用例として更に (10) と (11) が挙げられる。

- (10) a. Free control predicates: not restricted to actional complements
i) Volitional actions
{Running the race/Being quiet/Being examined by a doctor} annoys Max/is a drag.
ii) Nonvolitional actions
{Growing taller/Striking Simmy as smart/Realizing it's raining} annoys Max/is a drag. (p.527)
b. Nearly free control predicates: not restricted to actional complements
i) Volitional actions
Marsha spoke to Ed about {running the race/being quiet/being examined by a doctor}.
ii) Nonvolitional actions
Marsha spoke to Ed about {growing taller/having struck Simmy as smart/realizing it's raining} (p.527)
(11) Unique control predicates: restricted to actional complements
{Fred promised (Louise).../Fred persuaded Louise...} +i) / ii)
i) Volitional actions
{to run the race/to be quiet/to be examined by a doctor}.
ii) Nonvolitional actions
{*to grow taller/*to strike Simmy as smart/*to realize it was raining}. (p.527)

1. 3 唯一のコントロールと意味役割

唯一のコントローラーの統語上の位置は個々の（母型節の）主動詞によって個別的に決定される。更に、例えば、order や promise の場合、前者は目的語をコントローラーとして、後者は主語をコントローラーとして指定するが、order は、内項に<recipient>を、promise は外項に<giver>を意味役割として指定する。J and C(03:529) は、(12) の 'i' と 'j' をそれぞれ外項、内項とし、(13) において2組の 'i' と 'j' がパラレルの関係になっていることを指摘する（従来の PRO を用いない点に留意されたい）。

- (12) a. iorder_j b. ipromise_j

- (13) a. John_i gave Susan_j some kind of iorder_j to j*take care of herself/*himself.
b. John_i gave Susan_j some sort of ipromise_j to j*take care of himself/*herself. (p.529)

(13) の2つの用例により、（母型節の）主動詞の要求する意味役割がコントローラーの決定権を持っていることが理解できるのである。

次に、主動詞の要求する意味役割は表層構造上のものではなく、意味論のレベルのものでなければならぬということを見ておく。(14b) に対応する能動文 (14c) の容認可能性 (acceptability) が低いことについての理由を J and C(03) は明示していないが、order の<giver>としての the authorities が表層主語として生起すると、語用論的な不自然さが発生してしまうからであろう。

- (14) a. Susan was ordered by John to take care of herself.
b. It is ordered/advised/encouraged by the authorities not to shoot oneself/*themselves.
c. ??The authorities order/advise/encourage not to shoot oneself. (p.530)

(15) は promise の統語的振る舞いを示したものであるが、be allowed to の有無が両文の文法性が異なることの決め手となっている。

- (15) a. *Susan was promised by John to take care of himself/herself.
b. Susan_j was promised (by John_i) to j*be allowed to take care of herself/*himself. (p.530)

(15) はコントロールを扱った論文でしばしば提示されてきた有名な用例であるが、(15b) が文法的であるための条件として、J and C(03:531) は、補文の内容が約束する側よりも約束される側にとってより現実的な (plausible) ものと見みなされる場合でなければならない、と主張する。おそらく、この言説が過去の様々な研究者による説明を最も明確に代弁しているものと言えよう。

以上、§ 1. 1 - § 1. 3 において、J and C(03) より、コントロール現象に対して意味論的根

抛を求めることの意義を纏めた。尚、同論文は shout, signal, plead, beseech などのコミュニケーション動詞についても独創的な分析を行っているが、それについては紙幅の都合上省略する。

1. 4 コントロール現象と概念構造

J and C(03) は例えば, intend の概念構造 (conceptual structure) を (16) のように記述する。

$$(16) \quad X^{\alpha} \text{ INTEND } [\alpha \text{ ACT }] \quad (\text{p.537})$$

つまり (16) において, intend は行為 (act) を表す補文を従え, intend の主語 (α) がコントローラーとなることが表現されているのである。

$$(17) \quad \begin{array}{l} \text{a. } X^{\alpha} \text{ OBLIGATED } [\alpha \text{ ACT }] \text{ TO } Y \\ \text{b. } \left[\begin{array}{l} X^{\alpha} \text{ OBLIGATED } [\alpha \text{ ACT }]^{\beta} \\ \beta \text{ BENEF } Y \end{array} \right] \end{array} \quad (\text{p.537})$$

(17b) においては, be obligated は行為を表す補文 (β) の内容が Y に利益 (BENEF) を与えることの可能性が示唆されている。(17b) の 2 行目のように補足的な意味が文脈によって想定される現象を意味補強 (coercion) (註 5) という。次の用例は当該の (母型節の) 主動詞に意味補強が施されるか否かということを検証するものである。

- (18) a. What Pat did to/*for Stan was force him to leave/pressure him to quit/prevent him from talking.
b. What Pat did for/*to Stan was help him leave/enable him to quit/allow him not to talk. (p.539)

help には BENEF が補強されているが, force には補強されていないことが, 前置詞 to と for の選択制限の違いによって判別されるのである。

1. 5 コントロール現象と意味補強

前節でも触れたように (母型節の) 主動詞が補文の内容に制限を加えるのは, 概念構造に意味の補強 (coercion) が施されるからである。本節では, J and C(03) における意味補強とコントロール現象の関係を更に詳しく見ていく。

以下の (19a, b) において, intend, plan の統語的振る舞いが異なるのは何故か, ということについて J and C(03) は, [BRING ABOUT] が意味補強されるか否かという点に求めている。

- (19) a. Hilary intends/plans for Ben to come along to the party.
b. *Nancy intends for next year to be 1636.
c. For next year to be 1636 would be astounding.

d. Louise wished for Fred to be six years younger. (p.542)

(19a) は (20a) のようにパラフレーズすることができるのに対し、(19b) は (SF 小説などの文脈以外では) [BRING ABOUT] の意味補強は不可能である。

- (20) a. Hilary intends/plans **to bring it about** that Ben comes along to the party. (p.542)
 b. *Nancy intends to **bring it about** that next year is 1636.

尚、(19c) のようにコントロール現象が関わっていない場合や (19d) のように intend や plan よりも計画性の低い動詞 (wish) が使用されている場合は、[STATE] を内包する補文の生起が可能となる。一方、(19a) の概念構造は (21a) ではなく [CAUSE] を内包した (21b) ということになる。

- (21) a. X^{α} INTEND [α ACT]
 ↑ *↑
 HILARY [BEN COME]
 b. X^{α} INTEND [α ACT]
 ↑ ↑
 HILARY [Y CAUSE [SITUATION]]
 ↑
 [BEN COME] (p.544)

以上、コントロール現象を意味論的に捉える手段として、概念構造を用いることの重要性及び、概念構造に意味補強 (coercion) の概念を導入することの意義を J and C(03) より要約した。次章では、同論文について若干の論評を加える。

2. Jackendoff and Culicover(2003) についての論評

J and C(03) は、概念意味論 (conceptual semantics) に立脚しながら英語のコントロール現象を扱った独創的な論文と言える。以下、同論文についての論評を 3 点挙げておく。

第 1 に、(22d) のような通常の不定詞補文とは異なり、補文が不定詞間接疑問節 (22a, b, c) の場合、各用例間のコントロール関係に差が生じてしまうという点について。

- (22) a. Harry_i told Sally_j how to _{j/gen/*i+i+j}defend herself/oneself/*himself/
 *themselves/*myself.
 b. Harry asked Sally whether to take care of himself/*oneself/*herself.
 c. Amy_i knows that how to take care of herself/oneself/myself/yourself/ourselves
 [= you and me, Amy and me] is a tough question. (p.524)
 d. Harry_i told Sally_j to _jdefend herself/*oneself/*himself/*themselves/*myself.

(22c) については that 節 (CP) の意味特性 ([FACTIVITY], [ASSERTIVITY]) を用いれば、自由 (free) コントロールであることの根拠を得ることができるものと思われるが、(22a) と (22b)

のコントロール関係の差については、例えば (23) のような概念構造を用いたとしても、それがどの程度普遍的な構造なのかという疑問が生じる。

$$(23) \quad a. X^{\alpha} \text{ ADVISE } Y^{\beta} \left[\begin{array}{c} [\beta / \gamma \text{ ACT }]^{\delta} \\ \alpha \text{ BENEf } \beta / \gamma \end{array} \right] \quad (= (22a) \text{ のCS, } \gamma = \text{generic})$$

$$b. X^{\alpha} \text{ INTERROGATE } Y^{\beta} \left[\begin{array}{c} [\alpha \text{ ACT }]^{\delta} \\ (\beta \text{ BENEf } \alpha) \end{array} \right] \quad (= (22b) \text{ のCS})$$

(23a) では総称の (generic) γ の生起条件が必要になるし、(23b) では意味補強 (coercion) 要素 BENEf の生起条件が必要になる。これらの条件、特に後者については、個別言語の文化的背景を考慮する必要がある、そうするとメタ言語のレベルにおける意味論の範囲を超えてしまう。

第2に、§ 1. 3でも触れたように母型節 (matrix clause) の主動詞が同じでも補文節の be allowed to の有無がコントロール関係に差を生じさせる現象について。

(24) の両文においてコントローラーが異なる ((24a) では Sally, (24b) では John) のは何故かということについても、我々は上の第一の問題、つまり語用論が意味論の領域に侵入してしまうという問題の処理に迫られる (語用論と言語文化論の関係については本稿では立ち入らない)。

(24) a. John_i asked Sally_j to ~~take~~ care of herself/*himself.

b. John_i asked/begged/beseeched Sally_j to ~~be~~ allowed to defend himself/*herself.

(p.534)

第3に、コントロール関係を含んだ文の概念構造を求める場合に当然のことながら、母型節の主動詞及び、補文節の内容に対し、意味分解 (semantic decomposition) を施すことになる。ところが、この作業のプロセスで用いられる意味成分の数を数個に絞り込むことが困難であるという問題点が挙げられる。(25) の4文間に容認可能性 (acceptability) の差が生じているのは何故かということについて、J and C(03:546) は、言外の権力関係 (implied authority relation) という概念 (仮りに [IAR] としよう) を提唱する。しかしながら、このような [IAR] や [BENEf] といった意味補強 (coercion) 要素の想定の仕事はアドホックであり、言語習得可能性 (learnability) の観点から好ましくない。

(25) a. ?The children asked Grandma to be able to stay up for the late show.

[to be able here = 'be permitted by Grandma']

b. ??Montana asked the doctor to be healthy by game time on Sunday.

c. The student asked the teacher to leave the room.

(無標の文脈では、「生徒は先生に退室の許可を求めた」という解釈が優勢)

d. The goalkeeper asked the coach to be replaced.

(無標の文脈では、「ゴールキーパーはコーチに (キーパーの) 選手交替を求めた」と

以上, J and C(03) についての問題点を指摘した。最後に, 次の統語現象を紹介して, それを本章の締め括りとしてたい。

(26) は, { } で囲んだ部分の違いがコントロール関係の違いを引き起こしている例である。

(26) a. Nominal

Bill_i avoided/resisted { i*:attempts to shoot him_i }.

Bill_i expected an { i*:attempt to shoot him_i }.

Bill_i anticipated an { i*:attempt to shoot him_i }.

b. Verbal

Bill_i avoided/resisted { i:attempting to shoot himself_i }.

Bill_i expected to { i:attempt to shoot himself_i }.

Bill_i anticipated { i:attempting to shoot himself_i }.

c. Adjunct predicate

Bill_i examined Susan_j without { glasses on_{i/j} }.

d. Verbal

Bill_i examined Susan_j without { i*:having glasses on_{i/j} }.

(p.553)

J and C(03) は, (26) のような統語現象についての明晰な解決策は提示していないが, 上の現象も概念構造と意味補強 (coercion) という 2 つの道具立てを用いれば解決できることが同論文から十分に窺い知ることができる。

3. おわりに

本稿では, 英語不定詞 (説明の都合上, 動名詞も若干含まれている) の意味上の主語 (PRO) とそのコントローラー (先行詞) の対応関係について, J and C(03) の概念意味論による分析を紹介, 検討した。

同論文は, 概念構造上においてコントローラーと被コントローラー (PRO) の対応関係が, 生成文法のコントロール理論における両者の対応関係よりも説得力ある記述ができることを (部分的に) 実証している。

そもそも, コントロール理論は, (生成文法における) 1980年代の束縛理論 (binding theory) の研究過程において, 中心的な地位を占めてきたわけではない。つまり, 生成文法は文法範疇 X P の移動 (movement) に対する制約 (constraints) については見事な成果を上げているが, 文法範疇 X P, Y P 間の関係 (relation) (註 6) については概念意味論の方がその説明を得意とするのである。今後, 生成文法と概念意味論は相補的な関係を保ちながら, 文法論の更なる深化に貢献していくものと思われる。

[註]

- (1) 例えば, i) Ich wusch mir die Hände. (私は私の手を洗った) における mir に着目されたい。
- (2) 本稿における () 付きのページ数は, Jackendoff and Culicover(2003) のページ数を指す。尚, 用例の一部分において, 支障が生じない程度に若干, 記号等を調整した。
- (3) コントローラーを形成する全てのメンバーが被コントローラーと一致する場合, これを包括的(exhaustive) コントロールと言い, メンバーが一部の場合, これを部分的(partial) コントロールと言う。
- (4) 被コントローラーの削除が必要な場合, これを回避的(obviate) コントロールと言う。
- (5) 語彙意味論(lexical semantics)の重要概念。
- (6) 「文法範疇」と「文法関係」の区別の重要性については既に, Chomsky(1965: § 2.2) で指摘されている通りである。

[主要参考文献]

- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- . 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Jackendoff, Ray. 1972. *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- . 1990. *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- Jackendoff, Ray, and Peter W. Culicover. 2003. “The semantic basis of control in English”. IN *Language* 79: 517-556.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- Rosenbaum, Peter. 1967. *The grammar of English predicate complement constructions*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- 鈴木博雄. 2001. 「英語不定詞論(2)——補文の事象性をめぐって——」『学苑』729号, pp.1-13, 昭和女子大学近代文化研究所。

(すずき ひろお 英語コミュニケーション学科)